学 位 論 文 要 旨

学位論文題目　有島武郎の女性観に関する研究―『或る女』における早月葉子像の形象―

申 請 者 氏 名　盧昱安

本研究は、有島武郎の『或る女』に描かれた葉子像の形象を考察するうえで、有島の女性観に着目し、両者の関係について解明しようとしたものである。有島の女性観を考察するにあたって、本研究が注目したのは彼の書き残した書簡、日誌、講演録、評論、広告文などの周辺資料である。各章の概要は以下の通りである。

第一章では、アンビバレントな葉子像を考察した。この考察を展開するにあたって着目したのは有島が石坂養平に宛てて書いた書簡である。この書簡によれば、有島は、女性が男性に対して「憎悪」と「愛着」という二つの矛盾した本能を持つと述べており、こういった女性観のもとに『或る女』は生まれたと記している。つまり、主人公葉子の造形には、男性に対して〈憎悪／愛着〉という二つの矛盾した本能を抱え持つ女性の姿が投影していると想定されるのである。但し、ここで留意すべきは、その相反するように見える本能は、葉子の場合、男性に対して発動されるばかりでなく、女性に対しても発動されている点である。本研究では、葉子は、男と女という関係に限定してアンビバレントな状況に陥るのではなく、女性との関係においても同様の状況に陥るということを検討することになる。

第二章では、夢遊病者に喩えられる葉子像について考察した。葉子の精神の失調について、従来はヒステリー症と結びつけて論じられる傾向にあった。しかし、作品に表れた葉子の「ヒステリー」の初出場面を見てみると、そこでは夢と現の混淆した状態が描かれており、加えて、そういった状態に陥っている葉子のことを「夢遊病者」に喩えるかたちで描出してもいた。本研究ではこのような点に着目し、葉子の精神状態をヒステリー症と擦り合わせるのではなく、作品自体の表現としてある「夢遊病者」という切り口からその内実を具体化するべく論を展開した。

第三章では、評論「惜みなく愛は奪ふ」における有島の「本能」観に着目し、葉子に関連して用いられている「本能」を考察した。有島は、『或る女』において葉子を本能の赴くままに生きる女として描いたと言われている。ここで言う「本能の赴くまま」というのは、自由奔放に生きるという意味であろう。こういった意味で「本能」を捉えていくのは、いわば辞書通りの解釈であり、おおむね妥当と言える。但し、葉子に関する「本能」の初出を見てみると、それは男に奉仕する前時代的な女性像そのものであって、決して「新しい女」とは言えない。有島は、前時代的な女性の相貌を見せ始めた葉子を「女の本能」に目覚めた女性として描いているのである。果たしてこの「本能」とはいかなるものであるのか。このような問題意識のもとに、有島語彙としての「本能」に着目し、この語が〈精神／肉体〉という二項対立を揺れ幅としつつ葉子の人物造形に関わっていることについて論じた。

第四章では、コケットとしての葉子像を考察した。この考察を展開するにあたって着目

したのは有島が浦上后三郎に宛てて書いた書簡である。この書簡において有島は『或る女』の執筆意図を書き残している。そこには、男と女は対等な関係ではなく、女は男の「奴隷」であり、そのような従属的な立場に置かれた女にとって、男を「籠絡」しようとした時に用いることのできる武器は「性慾的誘惑」であるという趣旨の叙述が見られる。留意したいのは、その書簡の中で有島が、先の執筆意図について、ある程度までの「醇化」をしたが、その「醇化」が不足していたため、「私の期待を裏切って硬化」したとも述べている点である。果たして、有島が『或る女』において実践しようとしたコケットな女の形象はいかなる「醇化」と「硬化」を見せているのか。本研究では、以上のような問題意識のもとに、まず、有島の女性観をコケットリーとの関連から再検討する。そして、そのような女性観の実践としてある葉子のコケットリーとしての造形が、いかなるものとして展開されているのかを明らかにした。

第五章では、堕落する葉子像を考察した。この考察を展開するにあたって着目したのは有島が書いた『或る女』の広告文である。有島は『或る女』の執筆意図について、「醜」や「邪」、あるいは「堕落」にこそ目指すべき「人生の可能」があると述べている。従来、この「人生の可能」をめぐっては、それが『或る女』という作品でどのように主題化されているかという観点から論じられる傾向にあった。本研究ではこの問題に対し、作品の主題との関連にとどまらず、そういった発想を持つに至った有島の人生観の形成や、その人生観が作中人物早月葉子の形象にどう関わっているのかについても検討を加えてきた。

終章では、葉子の造形は有島の女性観が忠実に投影されたものではなく、作品に固有のものとして自律的に描かれているという見解を得るに至った。『或る女』における葉子という登場人物は、テクストが紡がれていく過程で有島の女性観から乖離し、固有の生として自立していく。これが本研究の明らかにした葉子像の形象である。

（様式９）

学位論文審査の概要と結果

報告番号	東アジア博 甲　第　　号	氏　名	盧　昱安
論文題目	有島武郎の女性観に関する研究―『或る女』における早月葉子像の形象―		

（論文審査概要）

本論文は、大正期に活躍した白樺派の作家有島武郎と、その代表的作品である『或る女』を対象として、作家の女性観や作品に形象された女性像について考察を展開したものである。作家の女性観については、有島の遺した書簡、日誌、講演録、評論、広告文などの周辺資料を手掛かりとして分析し、作品に形象された女性像については『或る女』の主人公早月葉子の造形に着目することで具体化を図る。その上で、作家の女性観が作品の女性像の形象にどう関わっているのか、その投影と齟齬、あるいは乖離の様相を明らかにする。

本論文の構成は、序章、及び五つの章にわたって展開される本論部分、そしてそれらを総括する終章から成る。また、巻末には、本論部分を展開するにあたって使用した有島語彙の用例調査表を付し、各章の参考文献目録を収める。各章のタイトルは以下の通りである。

序章
第一章：『或る女』におけるアンビバレントな葉子像―石坂養平宛書簡を手掛かりとして―
第二章：『或る女』における「夢遊病者」としての葉子像―「ヒステリー」を端緒として―
第三章：『或る女』における葉子の「本能」
　　―「惜みなく愛は奪ふ」に見られる有島武郎の「本能」観との関連―
第四章：『或る女』におけるコケットとしての葉子像
第五章：『或る女』における堕落する葉子像―有島武郎の人生観―
終章
付録
参考文献一覧

１．創造性

本研究の学術的な特色は、文学作品に描かれた人物の造形や作品の構造を考察するうえで、有島武郎の女性観の特徴や思想の変化に着目し、その影響関係について解明しようとする点に求められる。従来の先行論の多くは、有島の経験に基づいて形成された価値観や思想がいかに作品の中に内在化しているかを考察するものであり、その結果、有島の作品はキリスト教や西洋文学の影響を受けているという見取り図が示されてきた。このような先行論の方法は、いわば、有島の実人生をそのまま作品のガイドラインとして適用するものであったと言える。しかし、周辺資料に見える有島の言説を追っていくと、時としてそこには転向や自家撞着などの揺れが見られる。本論文ではその端的な例として「浦上后三郎宛書簡（大正八年十月八日付）」に記された「醇化」と「硬化」の比喩に着目し、有島の執筆意図と作品『或る女』との間に乖離が生じている可能性を指摘する。そして、この仮説を立証するべく、主人公早月葉子の憎悪と愛着（第一章）、夢と現（第二章）、本能（第三章）、コケットリー（第四章）、堕落する人生（第五章）といった各局面における造形の具体化に努め、作品に形象された葉子像が有島の女性観をどのように投影し、あるいは乖離しているかを検証する。この投影と乖離の両面に視点を据えてゆくところに論者の独創的な点があり、この点をもって本論文の創造性は極めて優れていると判断した。

２．論理性

有島の女性観や思想の転換が作品の人物像の形象にどのように投影され、あるいは乖離しているのかについて、本論文では、その投影と乖離の様相を有島の遺した周辺資料に立脚点を置きながら、論理的に作品分析を展開する。以下に、各章で析出された投影と乖離の様相について概要を示す。

第一章では、石坂養平宛書簡に着目し、女性は男性に対して〈憎悪／愛着〉という二つの矛盾した本能を抱え持つという有島の女性観を抽出する。そして、その女性観が葉子にどのように投影しているかを検証し、葉子の〈憎悪／愛着〉という感情の在りようは対象人物毎に異なり、一律に有島の女性観が適用されるものではないことを明らかにする。

第二章では、「ヒステリー」や「夢遊病者」といった言葉に注目し、夢と現の間で混淆する葉子像が形象されていることを読み取る。そのうえで、有島の用いる「ヒステリー」や「夢遊病者」とは、社会通念上の概念をそのまま適用しているわけではなく、そこから乖離して、固有の意味を展開していると論定する。

第三章では、有島が評論「惜みなく愛は奪ふ」の中で展開した「本能」論に着目し、それが〈精神／肉体〉という二項対立に基づいていることを指摘する。そして、「本能」という語が葉子像の形象にどう関わっているかについて検討を加え、恋愛相手に精神や肉体の充足を「本能」として求める葉子像が読み取れる一方、〈精神／肉体〉という単純な二項対立の関係では捉えきれなくなってゆく葉子の「本能」の用例も確認されることを指摘する。

第四章では、有島の女性観の実践としてある葉子のコケットリーについて検討を加える。その際に着目するのは浦上后三郎宛の書簡である。この書簡で有島は、西洋由来の女性像を描こうとしたという『或る女』の執筆意図に触れるも、それが十全なかたちで実践し得なかったことを述べている。論者はこの有島の執筆意図と作品観に基づいて葉子の造形を検証し、更には、檜山京子宛の書簡をも参照することで、有島が葉子を「人間」として忠実に描いた結果、その人物像が自立し、当初の構想から乖離していったとの見解を得るに至る。

第五章では、有島が書いた『或る女』の広告文に見られる特異な人生観の形成に着目し、その人生観と葉子像の形象がどのような関係に置かれているのかを考察する。広告文に記された有島の執筆意図は、堕落した女の人生を描くというものであり、しかも、その堕落にこそ目指すべき「人生の可能」があるというものであった。葉子の造形はその人生観を実践するかのように展開し、社会制度上は蔑視される存在である〈姦淫の女〉の生き方が葉子自身によって肯定されていく。葉子に見られるこのような発想の転倒は、有島の特異な人生観に通じるものとも言えるが、作品の終盤で葉子は「人生の可能」を見出すことなく最期を迎えており、ここに有島の人生観からの乖離が読み取れると論じる。

上記の通り、各章における投影や乖離の様相を析出していく試みは、漸層的に自立していく葉子像の形象を具体化し得ており、また、周辺資料に立脚点を置く論証の手続きも説得力のある成果を挙げていると判断される。よって、本論文の論理性は極めて優れていると判断した。

３．厳格性

本論文の序章では、論を展開する前提として先行研究の状況が概観されている。本論文の中心的な問題となる有島の女性観については、キリスト教の影響や西洋文学の受容などのアプローチが試みられてきたこと、あるいは、有島の生きた時代における女性解放運動との関わり、有島の形象する女性像の〈新／旧〉をめぐる論争などが俯瞰されている。また、本論文の研究対象となる『或る女』の作品研究については、『或る女のグリンプス』をも含めた成立過程や改稿に関する論、モデルや素材となった事件との関係を検証する論などの初期の研究の蓄積、そして、フェミニズム・ジェンダー批評などの近年の研究にも目を配り、全体的な研究の動向が押さえられている。

各章の冒頭では、『或る女』の個別の問題に関連する先行研究の渉猟と整理に努めており、このような手続きのもとに本研究の立場やプライオリティーを画定し、そのうえで論を展開していくという姿勢が貫かれている。以上のような点をもって、本研究の厳格性は極めて優れていると判断した。

４．発展性

本論文は、先行研究が領導してきたスキームの把握に努めつつも、それをそのまま受け入れるのではなく、どのように相対化し、乗り越えていくかという意識が顕著であり、そこに発展性がうかがえる。例えば、『或る女』を女性の生き方を描いたテクストとして位置づけ、フェミニズム・ジェンダー批評という視点から読み直す論が九〇年代以降盛んであるが、そういった諸論の在りようについて、「性差が抱える問題と、そのあるべき答えを所与の前提として文学作品を読むということは、様々な読みを放棄しかねない危うい営み」であると警鐘を鳴らしつつ、テクストに書かれた表現に立ち戻り、表現に依拠しながら人物造形や物語の構造を分析するべきであると説く本論文の統括的な方法意識は、文学研究の正統的な在りようを示しており、理論主義が陥りがちな隘路を免れるものとなろう。とりわけ、第二章は本論文中の白眉とも言える。従来、女性に対してバイアスのかかった「ヒステリ

ー」という用語で論じられてきた葉子の精神状態を、「夢遊病」という語に着目することで脱構築的に読み直し、併せて有島の語彙の固有性を浮かび上がらせていくものとなっており、新たな表現論の可能性を拓いたように感じられる。なお、社会通念上の用法から乖離する有島の語彙については、第三章で「本能」、第四章で「コケット」、第五章で「堕落」「人生の可能」などの語を取り上げ、いずれも脱構築的な手法でその固有性を浮かび上がらせるものとなっており、本論文の特徴的な方法と化している。今後、このような有島の語彙の固有性について、範囲を広げて調査や考察を進めていけば、有島武郎文学の新たな価値が掘り起こされてくるであろうと予想される。

以上、審査委員４名の合議により、全体として「極めて優れている」と判断し、論文審査結果を「合」とする。

論文審査結果
合・否

審査委員　主　査　（氏 名）森野正弘

（氏 名）柏木寧子

（氏 名）高橋征仁

（氏 名）尾崎千佳

（氏 名）　　㊞